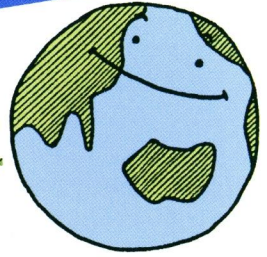


RIICC Newsletter



Osaka Jogakuin (Wilmina) University
Research Institute of International Collaboration and Coexistence

大阪女学院大学 国際共生研究所 <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/riicc>
540-0004 大阪市中央区玉造2-26-54 e-mail: riicc@wilmina.ac.jp

November 8, 2010

・巻頭エッセー「国際共生と国益」..... 1	・Project 3 外国人児童生徒のための言語教育モデルの研究..... 3
・研究所プロジェクト活動・最近の研究活動紹介	・連載シリーズ2「世界の潮流：核兵器のない世界」..... 4
・Project 1 社会的公正に基づく共生の研究 2	・書籍紹介『グローバル化の中のアジアの児童労働 4
・Project 2 高等教育における英語教育の方法研究..... 2	-国際競争にさらされる子どもの人権]



香川 孝三

国際社会は国を基本単位としている。国と国との関係をいかに築くかという問題を考える際に、その目標の1つが国際共生だと考えられる。その際に国益が持ち込まれるとやっかいなことになる可能性が大きい。国際共生を築くことが国益を高めることになることが理想であるが、国益の主張が国際共生を損なう場合がある。というのは、国益は国内の情勢を反映して形成されてくる場合が多いので、一方が自分の国の国益をぎりぎりまで押しつけて実現しようとすると、それによって被害を受ける国は当然、それに反発する。その2国間はぎくしゃくしてくる。つまり国際共生とは言えない状況に陥る。特に隣国同士だとよけいに反発してしまいがちである。

2004年4月から2005年9月まで外務省との人事交流で、在ベトナム大使館公使として勤務したが、その間に中国とベトナム間の国境をめぐる紛争に一応の解決がなされた。それによってベトナム北部の陸地と海洋部分の国境が確定された。しかし、ベトナム南部の沖合の南沙諸島で石油が採掘されるようになると、中国がそこを実効支配し始めてきている。中国は自分の支配地域を拡大しようとする覇権主義をあらわにしている。中国が支配地域拡大という国益を追求することが、ベトナム、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ブルネイとの摩擦を生じさせてきている。この紛争を通じて、一国の国益追求が隣国の国益とに摩擦を生じさせていることを実感した。

中国はベトナムを2000年以上支配してきたが、ベトナムは当然にそれを嫌っていた。いかに中国から独立するか国益となっていた時期があった。その間にベトナムは中国から様々な影響を受け、それが今も残っている。共産党の一党独裁体制を敷いていることにもそれが示されている。そこでベトナムは中国の統治の仕方を見習っていないながらも、一方で中国のやり方のマイナス面を認識して、それをやらないように動いている。中国とベトナムの間は愛憎相半ばする関係と思われる。しかし、ベトナムも次第に経済成長を遂げつつあり、それを維持していくことが国益となってきている。その結果、中国との経済関係は深くなってきており、相互の依存関係が拡大してきている。そこで、一方が他方に経済制裁を科すと自分に跳ね返ってくる関係が生まれてきている。ここに一国だけの国益追求に歯止めがかかる契機がある。経済のグローバル化による相互依存関係の深化が、2国間の対立をいつまでも続けさせない要因になってきている。

中国は尖閣諸島を自分の国の領土と主張して覇権主義を日本に押しつけてきている。これは中国国内の不安定要因を覆い隠し、国威発揚のためにおこなっていると理解される。それが現在の中国の国益だからである。しかし、一方、そのことが中国の政治・社会のアキレス腱を国際社会にさらすというマイナス面の効果も伴っている。国益をぎりぎりまで押しつけていることがいつまでも通じるのか疑問である。経済の依存関係が深まってきているために、他国への制裁が自分に跳ね返ってくる可能性が大きいからである。そこで、国際共生を図りつつ、国益を維持していく方法を模索していくことが必要である。どこかで妥協をはかり、落とし所を探らざるをえない。つまり、同じ地球に住む人間が国をつくることによって生じる紛争を避ける方法を探っていく必要がある。